

# 日本語の基礎・基本を身につけた児童生徒の育成

前釜山日本人学校 教諭

愛知県豊川市立東部中学校 教諭 近 藤 裕

キーワード：日本語力, ダブル

## 1. はじめに

釜山日本人学校は、韓国第2の都市、釜山広域市の南、海水浴場として有名な广安里海岸の近くに位置する。晴れた日には海の方角に日本が見える、もっとも日本に近い日本人学校である。釜山の気候は穏やかで、降雪は1年を通じて、ほぼ皆無と言ってよい。人々は友好的で温かみがあり、昔から親日家の多いことでも有名な街である。

こうした恵まれた環境のもと、平成19年3月現在、34名の子供達（小学部31名 中学部3名）が在籍し、教職員9名と現地職員2名と共に学校生活を営んでいる。

毎朝の登校時には、全職員が玄関で子供達を出迎え、彼ら1人1人とハイタッチをしながら朝の挨拶を交わす。休み時間には全校児童生徒と職員が一緒になって、サッカーを楽しんだり、全員で昼食会をったりなど小規模校ならではのアットホームな雰囲気を感じられる。

子供達は、日本人の両親を持ち、数年で日本に帰国する者が多い。しかし、一方、両親のうちのどちらかが韓国人で、生活言語が韓国語である子供も少なくない。彼らの多くは、日本語での日常会話に深刻な問題は見られないが、学習面では日本語力（特に漢字や抽象的な語彙）の不足が学習内容の理解を妨げ、十分な学習成果があがっていない現状が見られる（たとえば、子供の中には、算数などでは抜群の理解力を示し、学習への意欲も旺盛でありながら、どうしても日本の都道府県名を記憶できない者もいる）。また、学習には真面目に取り組んでいても、成果があがらないことが多いため、学習への意欲も減退するというような学習遅滞傾向も強くなっている。日本人の両親を持つ子供もでさえ、小規模校であるが故に仲間から語彙を学んだり、新語に触れたりする機会が少なく、日本国内の子供と比べれば語彙力が伸びないことが懸念された。言い換えれば滞在期間の長さで日本語力の発達が反比例するような傾向が見え、早急の対応の必要性が感じられた。

こうした釜山日本人学校の子供達に確かな日本語の基礎基本を定着させることを目標に、平成17年度から学校全体で研究活動を始めた。1年目は、その研究の手立ての中心に音読活動を据え、特に国語科を中心に研究を推進した。結果、多くの子供達が音読を上手にできるようになったものの、日本語力の向上といった観点から言えば、十分な成果があがったとは言いがたかった。そして日本語力の基礎基本を定着させるには、国語科の授業という限られた時間内の1活動だけでは不十分で、学校全体で取り組むべき問題であることが明白となった。

そこで18年度以降は国語科の授業は勿論、他教科の授業や学活など全ての活動を通して、実践的な日本語力の向上を図ることを中心に研究を進めた。

## 2. 研究の実際

### (1) 子どもの実態の把握について

個に応じた適切な指導ができるように、全校児童生徒を家庭環境と言語環境を観点として、以下の3つのタイプ



に分類し、変容のデータを収集した。本校では、年々タイプBの子どもが増える傾向が強く、またタイプAの子どもとタイプBの子どもの学力格差も益々大きくなってきている現状が浮かび上がった。

	家庭環境及び言語環境	共通した顕著な実態
タイプA	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両親とも日本人で日本語が第1言語である。</li> <li>・韓国語を流暢には話すことができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語を中心として、やや学力が低い。(国語力が不足していることが原因と考えられるアンダーアチーバー)</li> <li>・日本語の語彙が多少少なめである。</li> </ul>
タイプA2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両親とも日本人で日本語が第1言語である。</li> <li>・韓国語を流暢には話すことができない。</li> <li>・日本の生活経験が少なく、韓国の生活経験が長い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語を中心として、学力が低い。(国語力が不足していることが原因と考えられるアンダーアチーバー)</li> <li>・日本語の語彙が少ない。</li> <li>・読む活動では文節を視覚的に捉えることができない。</li> </ul>
タイプB	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人と韓国人のダブルであり、生活言語は韓国語である。</li> <li>・ある程度は日本語と韓国語の両方を話すことができるが、両言語ともに不十分である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語を中心として、学力が低い。(国語力が不足していることが原因と考えられるアンダーアチーバー)</li> <li>・日本語の語彙が少ない。</li> <li>・読む活動では文節を視覚的に捉えることができない。</li> <li>・日本語の文法や発音が韓国語と混同される。</li> <li>・早口で、まくしたてる様な言い方をする。</li> </ul>

## (2) 授業内での実践

本校の子どもたちは、本校が小規模校であるがゆえに、人前で発表したり、集会の司会進行を行う機会などが多く、人前であまり物怖じすることなく堂々と発表できる。しかし、それは事前に書かれた原稿がある場合に限ってのことであり、自分の考えや意見を瞬時にまとめ、日本語で表現することはできない者が多い。我々は、この原因を日本語の語彙力の不足と日本語表現活動の経験不足によるものだと考えた。そこで、国語の授業では語彙や国文法をゆっくりと時間をかけて教え、その定着のために日本国内の学校よりも特に多くの時間を割くことを決めた。学習指導要領には示されていない、語彙習得のための活動を授業中の核の1つとして位置づけたのである。

また授業中に、学んだ語彙を使用、活用する言語活動の場を意図的に作る実践を重ねた。勿論、国語以外の教科でも、自分の思いや考えを丁寧に説明・発表したり、伝えたりするような日本語の表現活動に取り組みさせた。例えば、算数・数学の授業などでは解法の説明を、社会や理科などでは自分の考えを系統立てて仲間に説明させる活動を行った。

また、ちょうど本校の多くの児童生徒にとって日本語学習はある種の外国語学習に近いと考え、英語教員から言語学的に優れた活動(音読やシャドーイング、フラッシュカードを使った単語の練習法、ゲーム性がある言語活動など)を紹介してもらい、国語の授業中は勿論、学級の時間や短学活で実践した。



### (3) 授業外での実践

#### (ア) 学校環境

校内掲示物を工夫し、子ども達の語彙力、日本語力を伸ばそうと考えた。例えば、四字熟語やことわざ、漢字などを紹介コーナーを作ったり、児童生徒全員による俳句コンテスト作品やひらがな書き方コンテストの作品等も掲示した。昼食時の校内放送にも工夫を凝らし、中学部生徒による本の朗読や落語などを昼の放送で流し、できる限り日本語に触れる機会を増やした。

#### (イ) 学校行事

インターナショナル校との交流会では、小学部5年生、6年生が日本語、韓国語、英語3カ国語による落語「饅頭こわい」を練習し、演目として披露するなど、行事にも言語を意識した活動を入れるように心がけた。

#### (ウ) PTA 読み聞かせ活動

PTAのボランティア10数人が週1回、朝の短学活の15分程度の時間を利用して、絵本や紙芝居を読み聞かせを行った。読み終わった本を掲示板で再度紹介したり、子どもらの感想を紹介するといった活動も行った。

## 3. 考察

言語を身につける最上の方法は、幼児が母国語を身につける時のように、言葉のシャワーの中で、じっくりと時間をかけて、自然と語彙や文法を習得することである。しかし日本人学校の子どもたちは適量の日本語のシャワーを受ける環境にいない。つまり日本国内に住んでいれば、普通にテレビ、雑誌、街の看板から新しい語彙を吸収したり、大勢の級友から新しい言葉を学ぶこともできるのだが、日本人学校の子どもたちにはそうした機会が極端に少ないのである。そのため、学校が特別な解決策を講じない限り、日本国内の子どもたちと同じようには日本語を身につけることができないことは明白である。

韓国では日本人学校は正式な教育機関として認可されていない。これは、つまり日本人学校を卒業した子どもは韓国の高等学校への入学資格を有さないということであり、韓国国内ではインターナショナル校などの学校を除けば、進学先が一切ないということである。したがって、多くの子どもたちは最低でも中学卒業までには、帰国し日本の高等学校へ進学を考える。当然のように彼らの多くは受験で苦労し、幸運にも入学を許されても高等学校の授業で苦労する場合が多い。

こうした現状を踏まえ、日本人学校の教員は少しでも彼らが日本人学校を卒業した後も困らぬように、様々な手立てを講じる義務がある。釜山日本人学校の研究はまだ十分な成果をあげたとは言い難いが、少しずつでも子どもたちの日本語力を伸ばす具体的な手立てを講じ始めたことは大変尊いと思う（ちなみに年度初めに行った教研式の学力テスト結果では、タイプBの子どもらに大きな国語の学力の伸びが見えるなど、顕著ではないものの多少の成果はあがっていると思われる）。

そして、これからも釜山日本人学校の保護者や学校関係者が一体となって、この大問題に引き続いてあたってくれることを切に願っている。